



新板

須吉入
朱板名附

酒
息
流
性
来

元齋板





の手次入しそめ
 雅似津の奇石深淵の
 玉行とりの余朝しそ
 もる古今集の
 序とみまの
 おんたのめと
 ちりそ
 帝の御世に
 ちりしす
 ちり本のたふ
 よろそちり茶さ



秋はちのまに
 采女を女さし
 着城王と書り
 有下しはさ
 秋父母のまを
 有下人のにらまし志け
 有下もさるまへのりは
 但秋の書り文とさ
 はせの中ぬらまきと
 有下を秋かむら
 是秋ぬんはま

秋
 文庫

言
 去



消息書法集
 凡消息也一筆破六
 貴賦者身一筆破四
 雅德と書法は紙に
 不智書則と為舞人

女の称号

史姓之はそと
 親王の家名と
 かつらとせむと
 内親王とヤ
 ちのりまて親王
 の宮下なり親
 美い女二女二女
 このまゝとせん
 廣くはるまゝ

江戸人百大恥辱と可
 侍事丈夫一筆破と足
 世傳逆とて内女と心
 世傳逆とて内女と心
 ととをわるとも出書と
 世傳逆とて内女と心

天子の御母君
 とし太後と申
 ちり又回母も
 女院とも稱し
 ちりし御深君
 天子の位不別
 玉一バ祖母君と
 尊んで皇太
 后と稱し
 何門流と大理

後公日月湖之月又月
 日附金令金虎元令月
 世之亦考不採書
 法亦也足然之推云
 儲君後推之氣令之るも

の御門の君と
 付て呼ばるる
 ちり歌王方の
 御毒と御君
 不のふちり
 人皇卒四代
 仁明天皇の
 親の御太子
 御毒一と
 よめて後の御教

皆後之御依此之悔状
 斗之上下揚る不書本
 文之亦る下も書依る仁
 海之定法也之外之可
 成之上下揚る書之法本

秋遠きせしむ
後清阿そ増
りく休息一
玉ふ本紙神皇
取しつるその
後清阿教と
阿保親王一
玉の親王の
清書こそま
つる行中

第一下とる皇書法と
自ら長將と引正る書
律と身上と揚る書紙通
来教子且又婚記と
後味と返字と不書事

宮女ふあむび
たれあ人のり
紙時の太後の
清書に玉のり
よりひなもと
すりけりまご公
御殿と人の清
書と清書中
と稱する事
と案の中

能く格最上とる貴人言
位人對と御書清書
健全其次とる皇書美人也
清書と案書法清書
案類と案類と案類

くはしひ地人
 のどくみごりふふ
 かんふふをわく
 かつふ所を中
 とのふ又諸候方
 此所毒とわの
 万とのふたしハ
 少陰ふしそ
 女の性ぢり也
 こゝと候ふがま

田田也さへはる色も素
 徳時貴人對答以
 田田事人又田田混
 合身事法遠く空
 沖機疎能市勇健限



そのい
 ことふ下と金又と海之字
 可事事也却も消息也
 田田事も長一限致る事
 法成老ふ不辨る徳則ハ重
 言も之徳も之都る事人

小の方より
右の方より
公の附より
この人の妻は
余婦より
唐の婦より
夫人より
日本の方
よのへに

賢思書西の
玉る方切く事也
古保の来り俗間
詞を重言と知
近世其人其明
と次

徳之の妻は
沙弥達より
とよの年の
遊より
洞なり
よと
浮べ法中の
法を
とす水の
よまひ

今父名を父の
字も換へ字も
新有と大令父
名放る
沙令父換

百世所人の
妻ハ内妾内
方たる如房
とのハ禁中
は喫まき
長けて下ぐの
移る河くは
むり形くむ
云々ハ
さぬの女め

書も其甚反重書なり
若尔不斜文字書
重く中極は然不斜
加不周事成光媚
文書とくは言重反も文

くくくく
うち探員
くまの
とくま
たが天晴女
清更衣
和
貴
女房とよび
乃らが今

通と然不斜極と徳と
柳風雅意重之釋久
大儀名及所第一
可心事不勝去後受
字と事候名も徳事

ぶな浦一とも
 押あて女房
 のみふをり
 かりまふた
 難くおふ
 づき松号
 とおのり
 遊女の号
 五つてゆら

肝要な後石の事おも
 和辻廣熙字家等か
 見出らる書時と人
 傍甚でな安又其基なり
 諸田向紙書病と消息

付右ハきりん
 言はれの人
 下され奇金
 今も出さる
 烟のまき
 まおはあ
 花女ハ大江の
 玉の如く
 後撰集
 歌は
 ぬりた
 古くむら

成不便利なる其
 元來假名紙用日本
 風成と柳衣心集
 足城笑人主印白鳥
 大和歌と御書小教



法王のけの附の平家
 我出ろく者思ふ法
 中にも重なる感念一箇本
 杜定て誦まひとそをそ
 分らざるごとし古來云

ちりその祿号
 ちりまのり又
 振政園白の
 沛毒と改所
 天子ふ代して
 万機の政事
 と振れたまふ
 人の沛毒たる
 ちり改不と云

是又由來の法也是為
 りそ事と名流況國を洞
 美ひるお初況統賦と
 おえなむ必返字不困
 振ん有庵し以再書受

書法

書法

六

大正の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と

復毎夜に教方及重く此
上猶又杯々中文之病氣
今復其身殊状大率
是為身之文道之安否
書事也叔也而機械

解法の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と
清毒の清毒と

乃習来として世間通用
成と今改りも宜き又難
有と云ふ上と對る之礼也
下と云ふ下と對る之礼也
由是と云ふ上と對る之

風のまをせぬハ

かまきり

かまきり

千載集

かまきり

教形

かまきり

かまきり

かまきり

かまきり

かまきり

千載

新法

十一

礼を重んずるは頂戴は羅

る賜ふは辱志し之既

満足致しは如却て中下

之底分先内はとあるを頂

戴仕とて身はと事も事と

足ハ心知を起結なり

将又文字を削去と改る

事も日本に因るを去

謂は海はと海はと云

之も是と積則は事との

平の重なる

因るは心知

通念どのより

たぐふ秋のた

は持女とゆ

たはなれて中

融とてそを

中らあひ

流り紙

さるがのせ

ちびらり

新法

十一

此の静

又の静

静の静

静の静

静の静

静の静

静の静

多岐の静

音由

満

多岐

多岐

倪倪

東

我

右

の

静

静

静

静

東都布山縣隱士 細河並輔著

弘化二乙巳年正月開板

鳥島

東都書林

森屋

増

我

5000

嘉永三戌年

近衛村川外卷